

風景

友田 浩一朗

静寂の廊下に朝の光がやわらかで、先週の慌しさを忘れた解析室の鍵を開けるとLEDが鮮やかで、ターボポンプの回転音が快適で、クライオの鼓動は今朝も元気だ。車のエンジンを始動させる様に高圧電源を入れると、待っていたかと装置は力をみなぎらせ、知らぬうちに私をF1パイロットにしてしまっている。

最高のマシン $i\ m\ s - 3\ f$ と最高のメカニック北島に恵まれた私は彼らの力を出し切らずにはいられない。週末にベークアウトでガス出しをしたチャンバーは超高真空を創り出し、クリーニングしたガンは自信を持ったイオンビームを出し続け、心地良い迄に素直に絞れてくれる。

今日は攻めれる。高鳴る興奮を抑え試料を装着しアクセルを踏み込む様にイオンビーム照射を開始する。マシンと路面コンディションを的確に捉えドライブするか如く $3\ f$ とサンプルそして自分が一体となる。中和電子銃とエネルギースリットの調整で界面での不安定領域をクリアし、ビーム電流量と照射エリア、コントラストアパーチャーそして二次系レンズの調整で感度を得ながらノイズを処理する。ディスプレイにプロットされ続ける検出強度を追いながら無心の時間が過ぎてゆく。遂にサンプルは心を開き真の姿を現す。これまで確認出来ずにいたピークがくっきりと姿を現した。晴れやかな感動が私を有頂天にさせる。イオンビーム照射時間とともに検出された元素の強度は順調に下がり、ノイズはギリギリまで抑えられた。来たぞ！チャンピオンデータだ！

入社後間もなく二次イオン質量分析装置を担当し、メーカーエンジニアの北島さんと出会い、装置の中身や調整方法を懇切丁寧に教えて頂いた。それは今でも色あせる事なく心に鮮明に刻まれた近くて遠い日々、少年の心で熱く過ごした日々だ。手中にありながらも、なかなか見せてはくれない分析試料の本質。データのひとつひとつが作品であり、その時の自分の全てであった。

失敗の積み重ねが成功への思いをさらに強くし、自分自身の不確かさと“装置”を教えてくれた。うまく行かない言い訳を並べてみたが、その先に成功は無い。素直に正直に自分と向い合い、その目でデータを見ると様々な事が見えてくる。試料の取り扱い、装置の調整・設定・コンディション・・・その時の自分を正確に知って見ないと見えない情報がある。自分に隠す事なく、自分を素直に正直に理解する。それは次へのチャレンジにつながり、自信にもつながる。誠実に突き進み、自分に言い訳することなく、素直になれば良い、正直であれば良い。

“分析”に出会って四半世紀となる。“分析って面白いですか？何が面白いですか？”と聞かれ“当然面白いよ！だって見えない物の真実がこの目で見えてくるから・・・”と熱く答える。しかし本当は“理由”などではなく単に“好き”なのだ

と思う。本当に好きなのだと思う。